

日本湿地学会「湿地の文化、地域・自治体づくりと CEPA・教育部会」

豊岡研究調査 報告書

1) 日 時 :

2020年3月1日(日)～3日(火)

2) 場 所 :

兵庫県豊岡市

3) 参加者 : 7名

笹川 孝一 (法政大学、部会長)、朝岡 幸彦 (東京農工大学)、芝原 達也 (谷津干潟自然観察センター)、日置 光久 (東京大学・海洋教育センター)、田開 寛太郎 (松本大学)、河村 幸子 (東京農工大学大学院博士課程)、石山 雄貴 (鳥取大学) (敬称略・順不同)

4) 概 要

本調査は、豊岡市におけるラムサール条約登録湿地を生かした地域・自治体づくりやCEPA(交流、能力養成、教育、参加、普及啓発)・教育分野がどこまで進んできて、何が新たな課題となっているのか、それをどのように進めつつあるのかについての理解を目的に、3日間の日程で行った。2日目には“コウノトリも共に生きられる地域づくり”という視点から、これまでの取組みと到達点、これからの取組みの方向性について、中貝宗治市長から直接お話を伺い、意見交換を行った。

5) 訪問地

- 1) 豊岡市立コウノトリ文化館 (コウノトリ市民研究所)
- 2) ハチゴロウの戸島湿地 (コウノトリ湿地ネット)
- 3) 加陽湿地 (中筋地区、豊岡河川国道事務所)
- 4) 豊岡市役所 (豊岡市長、環境経済課、農林水産課、コウノトリ共生課)
- 5) コウノトリ育む農法、水田ビオトープの取組み

問い合わせ先 : 部会幹事 田開寛太郎 k.tabiraki<at>gmail.com

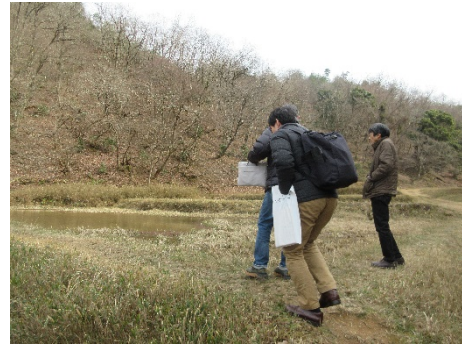
6) 調査内容

3月1日(日) 1日目

13:20～15:10 豊岡市立コウノトリ文化館(豊岡市祥雲寺127)



お話の様子



田んぼの学校の舞台(ビオトープ)の見学

上田尚志さん(NPO法人コウノトリ市民研究所代表理事)に、コウノトリ市民研究所の設立経緯、取り組み等についてお話を伺った。当会は1998年に発足し、生物調査、ビオトープづくり、環境教育、普及啓発を目的に活動をしている団体である。現在、正会員31名(30代6名、40代2名、50代7名、60代16名)、一般会員28名を中心に活動し、60代の多くは会の発足時からのメンバーだという。2015年には、豊岡市から豊岡市立コウノトリ文化館の指定管理を受け、常勤5名・非常勤複数名(平日5名、休日6名体制)の職員が随時コウノトリのミニレクチャーや館内展示の説明を行っている。また、併設する兵庫県立大学豊岡ジオ・コウノトリキャンパスの大学院生1名(アルバイト)を意識的に雇用し、連携協力の体制をとっている。

特徴的な環境教育プログラムとして、「田んぼの学校」(毎月第3日曜日、自然観察会)があり、発足時から20年もの間、ひろく市民に親しまれ、現在は各回50～100名の参加者がいるという。ほかにも、高校との連携協力による鶴見茶屋、コンサートなどのイベントを開催し、様々な方面から自然への入り口、自然保護へのきっかけづくりともいえるCEPA(交流、能力養成、教育、参加、普及啓発)を果たしている。

15:45～17:20 豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地(豊岡市城崎町今津1362)



ビジターセンター外観



お話の様子

佐竹節夫さん（コウノトリ湿地ネット・日本コウノトリの会代表）に、コウノトリ全国飛来状況、市民によるコウノトリ野生復帰の取組みとその反響など、ひろくコウノトリ市民活動についてお話を伺った。現在、コウノトリは全国を飛びまわり、2019年には鳥取市や坂井市（福井県）まで野外繁殖域が広がっている。しかし、突然の飛来や営巣に対する市民の反響はさまざまで、例えば、電柱への営巣に対しては行政や住民が戸惑い、それを被害と感じるケースもあるという。

そのような地域・自治体では、これまでコウノトリに関する普及啓発や市民活動が皆無であったと考えられることから、全国組織によるさらなるサポートが求められているという。当会の具体的な取組みとして、人工巣塔の設置があり、コウノトリを受け入れる体制づくりを積極的に進めている。現在、豊岡市域を中心に活動を進めてきた「コウノトリ湿地ネット」から、全国組織である「日本コウノトリの会」へと活動を展開し、これから発生する問題や課題に対して活動を進めていくという。なお、2020年秋には「コウノトリ未来・国際かいぎ」と併催し、中国、韓国からゲストを招へいした市民フォーラムを実施する予定。

3月2日（月）2日目

10:00～12:00 加陽水辺公園交流館（豊岡市加陽582）



お話の様子

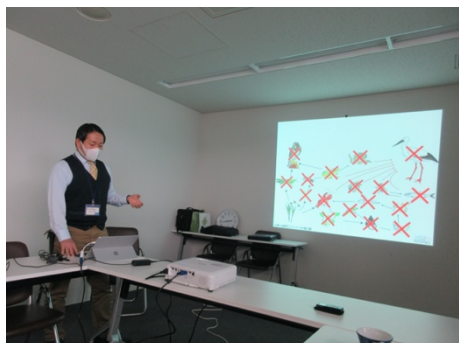


加陽湿地見学の様子

田中さん（国土交通省）に、円山川水系における自然再生事業や地域と連携した加陽湿地整備の取組みについてお聞きした。洪水が発生しやすい地形のため過去に大規模洪水を経験してきた円山川流域においては、自然再生事業と治水事業を両立させるために、中水敷湿地改良を行っている。円山川では、治水のために河道掘削において定水路全体を深く掘り広げるのではなく高水敷を年平均水位よりやや低いTP+0.0mまで切り下げ、川縁に湿地帯を作っている。

さらに湿地の環境を改善するためにその湿地形状の改良も行っている。加陽湿地整備に関して、「加陽地区づくり委員会」が河川協力団体として指定され、地域と一体となった湿地管理体制が目指されている。加陽地区づくり委員会と、加陽水辺公園を拠点とした加陽湿地のワイズユースのあり方について意見交換した。

14:00～16:15 豊岡市役所（豊岡市中央町2-4）



お話の様子

宇野さん（環境経済課）に、豊岡市環境経済戦略の概要をお聞きした。環境経済戦略は期限が設定されておらず、2007年に策定された戦略が現在でも使われている。環境経済戦略は、「持続可能性」「自立」「誇り」をキーワードとしているほか、目指すまちの姿が示されている。また、戦略の基本柱として地産地消など5本の柱を掲げているものの、環境経済認定事業やコウノトリツーリズム等については課題が残されているという。環境経済認定事業に関して、その認定項目や企業とコウノトリ、自然環境との関わり、中小企業を中心とした地方都市の産業振興のあり方などについて意見交換をした。

山本さん（農林水産課）に、「コウノトリ育む農法」、「コウノトリ育むお米」に関する取組みについてお聞きした。「コウノトリ育む農法」の概要や農法の広がり、「コウノトリ育むお米」の販売ルートの広がり、さらに、「コウノトリ育む農法」による米を利用した日本酒や泡盛、ケーキ等加工品の広がりについてもお聞きした。耕作放棄地や農家の高齢化といった豊岡市の農業が抱える課題や、小口農家への支援のあり方について意見交換した。

小松さん・岡居さん（農林水産課）に、豊岡市の獣害対策に関する取組みについてお聞きした。豊岡市では、市鳥獣害対策員による捕獲等の取組みによって農作物への被害を抑えている。しかし、野生動物が市境を超えて行き来するため、市単独での取組みには限界があり周辺との連携が不可欠であるという。また、湿地内での鹿の捕獲が難しいことや、ジビエ等の鹿や熊の利用について、食肉とするまでの労力やコスト、法規制等の制約から現状では難しいことをお聞きした。

宮垣さん（コウノトリ共生課）に、コウノトリ野生復帰や湿地保全に関する取組み全般や、地域との関わりから「小さな自然再生活動助成」についてお聞きした。この助成は、地域の生物多様性を保全するための活動（ビオトープづくりや繁茂する外来雑草の除去など）、観察会や生きもの調査、自然環境体験学習活動を対象に、地域の取組みを支援する制度である。最後に、「ラムサール自治体認証」制度について、湿地保全を「点」から「面」へ広げていくことや豊岡のラムサール条約登録湿地のあり方などについて意見交換した。

16:15～16:45 豊岡市役所（豊岡市中央町2-4）



お話の様子

中貝宗治さん（豊岡市長）に、湿地保全に関する新しい取組み（豊岡自然再生アクションプラン）についてお聞きし、「ラムサール自治体認証」制度等に関する意見交換をした。日常的にコウノトリを見かけることができ、コウノトリはもういいのではないかという意見があるなかで、「コウノトリも暮らせる豊かな環境の創造」に向けた新しい牽引力となる目標の設定が求められるという。そのひとつは、水路に魚がうじゃうじゃといて「水よりも魚の方が多い」とかつて語られたような、高齢者が子どもの頃の日常にあった自然を戻すことであるという。そうした背景を基に策定されたのが「豊岡自然再生アクションプラン」であり、特に戸島湿地や田結湿地でそうした人々を突き動かすような自然を再生することを目指す、という。

「ラムサール自治体認証」制度に関連して、豊岡市はこれまでラムサール条約やジオパークの認定を進めてきたがそれによる経済活性化等が見られなかったことから認証制度については、消極的だと思われる。また、現在では新しくバッジを取ることへのエネルギーを割くことよりも、現状のなかで観光に来た人たちへの対応を充実させることにベクトルが向いていると思われる。

「コウノトリ育むお米」の海外への販売に向けては、消費者に訴えかけるのではなく、「コウノトリ育むお米」をめぐるストーリーをバイヤーたちに伝え、豊岡のファンになってもらい販売してもらうことを目指している。さらに最後の意見交換では、「人と自然の共生」という人間と自然とを分ける西洋的表現や命のつながり・連鎖の中に人間がいる感覚にまで、議論は及んだ。

3月3日（火） 3日目

9:45～10:30 兵庫県立コウノトリの郷公園西公開エリア湿地ビオトープ



コウノトリの郷公園外観



湿地ビオトープ



給餌の様子

コウノトリの郷公園にてコウノトリの飼育と給餌の様子を見学し、コウノトリ市民研究所によるコウノトリのミニレクチャーを受けた。現在、飼育しているのは8羽であるが給餌の際は、ケージ外から野生のコウノトリ、ダイサギ、チュウサギ、カラスが餌を食べに来ていた。また、コウノトリは今は繁殖期ということで、オス同士の威嚇も見られた。

ほかにもミニレクチャーや見学から感じたこと、分かったことを以下の通り付記する。

- 飼育しているコウノトリは右の羽根を切られていて、一目でわかる。両方の羽根を切ってしまうとバランスが良くなり飛んでしまうため、片側のみ羽を切っているということであった。
- 野生のコウノトリは羽を切られていないため、自由に飛び回り、餌を食べに来ている。
- 餌を運ぶ軽トラックが鳥には分かっている、おかしなことに軽トラックが来ると一斉にそちらの方を向いた様子には驚いた。
- コウノトリには足輪をつけており、ボランティアが番号を確認し、飛来状況を記録していた。

11:15～12:30 豊岡市とのアフターミーティング（豊岡市役所）



お話の様子

宮下さん、宮垣さん、愛原さん（コウノトリ共生課）に、これまでの調査の話でよく分からなかったところや、一層詳しく知りたいところについて補足的な聞き取りを行った。豊岡市はコウノトリの野生復帰に積極的に関わりたい方を支援し育てる役割があるなど、これからの市の取組みの方向性や可能性について意見交換を行った。コウノトリの野生復帰とその意義を市民全体にあらためて啓発する重要性について再確認したところ、いまひとつの課題は、これまでの固定観念を変えていく転換期に差し掛かっているということであった。現在、全国各地でコウノトリの飛来が確認される中、環境だけでなく、経済などの全てのことに野生復帰の取組みが繋がっていることを議論しなくてはならない。豊岡市は「生物多様性と経済の好循環」の先駆けとして、これからも「いのちへの共感」（いのちへの共感に満ちたまちづくり条例、2012年）を人々の心に訴えていき、小さなことから豊岡のまちづくりの基礎を積み上げていきたい、ということであった。

最後に、日本湿地学会部会メンバーから、研究調査の3日間を通して勉強し学んだことについて感想を述べるとともに、子どもが学び考えて能力を育成していくための「豊岡学」教科書づくり、地域住民が地域づくりの主人公となるための社会教育・生涯学習の充実、動物の生態を知り生息環境を保全する担い手を育てるための動物園・環境教育の研究開発など、コウノトリや湿地を生かした地域・自治体づくり、ひろく湿地教育などの今後の可能性について意見を述べた。

13:30～14:30 豊岡市立コウノトリ文化館（豊岡市祥雲寺127）



お話しする稲葉さん



お話の様子

稲葉哲郎さん（コウノトリ育む農法実践者）に、コウノトリ育む農法の取組み内容、経緯、日々の苦労や課題等についてお聞きした。はじめに、農薬尽くめの米作りをしていた頃からどのようにして、コウノトリを育む農法に取り組んで来たのかの経緯をお話しいただいた。「昔の除草作業の大変さ、農薬を使わないことの労働の大変さがある。しかし、農薬を使うことによって生き物が全部死ぬとは思ってもしなかった。コウノトリがいなかったら、そのまま農薬を使う農法が続いていたのではないか。農薬をやめると田んぼに蛙や生き物が帰ってきた。見たことのない蛙の大群を見たとき、信念を持ってやるべきだと感じた。自分の子や孫たちにふるさとを残したい。」と、農業の苦労、そして、家族への想いなど、ご自分の体験を語っていただいた。

コウノトリ育む農法の確立に向けては、研究会（研修、視察、学習会）を立ち上げ、毎月集まっては自由に意見交換を繰り返し、4年後の2001年に具体的な計画案「地区・里づくりプラン」を作成した。それが羅針盤となり、準備委員会を経て2002年にコウノトリの郷営農組合が発足した。県の農業改良普及センターと協力して、無農薬栽培、環境に配慮した農業に取り組み、コウノトリと人の命を守る農業、安定した価格、品質の向上、質のよい商品を目指してきたという。

14：45～15：30 豊岡市下宮地区・水田ビオトープ



ビオトープの見学



広がるビオトープ

宮村良雄さん（ビオトープ管理者）に、ビオトープについてお話を伺った。豊岡市では、市内の色々なところ（主に休耕田）を活用したビオトープ（昆虫、魚、野鳥など小動物の生息環境や特定の植物の生育環境を意識した空間）の整備を進めている。ビオトープの管理は地域・農家等にお任せしており、例えば、蓮池を整備して観光利用したり、ビオトープを交流の場所としてイベントを開いたりするなど、様々な活用方法が見られるようになったという。

また、宮村さんからはビオトープ管理に取り組んだ経緯や管理方法、自然や子どもたちへの想いに触れ、「年間24,000円（管理委託費）をもらっても管理を続けるのは大変なこと。続けられるビオトープとはどういうものか、農家でも続けられるビオトープ管理を考え、工夫しながら続けている。」「ドジョウ、エビ、アカガエル、クロゲンゴロウ、ヒメゲンゴロウなどが見られる。」「蛙の近くでコウノトリが餌を食べるので、蛙をつくっているが、管理が大変だ。」「学校は生きものを捕まえても逃がすように教育することが多いが、本当は子どもたちには生きものを持ち帰って観察してもらいたい。」「ビオトープで子どもたちに思いっきり遊んでほしい。」などのお話を伺った。